九〇年代のロシア

熊原　晶子

ロシア人と自然

モスクワは、人口一二〇〇万人が住む世界の中でも大きな都市です。緑が多く、都市に占める林や森の面積は、モスクワ市の面積の約三四％、約三六〇〇〇ヘクタールぐらいあります。

ロシアの住宅〔集合住宅〕は、必ずと言っていいほど、中庭（двор）〔dvor〕があります。中庭は、大体、公園になっていて、散歩したり、赤ちゃんを乳母車に乗せ外気浴をしたり、少年達がサッカーやバレーができるグランドもあります。

私の家の入り口の傍には、おじさん達が、木の下に、木の机をつくり、ビールを飲み語り合う憩いの場所になってしまいました。（後に主婦の反対にあい、公共の秩序を乱すということで、この机は撤去されました）

年末は、この中庭の松の木にツリーの飾りをつけ、三一日の真夜中の一二時が近くなると、シャンパンを片手に、庭にでて、新年になったとたんに「Ура―！、Ура―！」〔Ura―, Ura―!〕と、知っている人も知らない人もみんな一緒になって、新年を祝うのです。酔っているので、歌をうたったり、花火をあげたりと、それぞれが勝手に新年を祝ってはしゃぎ、なにか新年は良いことがあるような気になります。

私が住んでいた住宅は、建物が円形に建てられていて、建物の内側は大きな двор〔dvor〕で公園になっていました。すぐそばには、モスクワ

郊外の果てしない森林が広がっていて、小川もあり、息子とよくいっていました。

ところで、この森、よいことばかりではありません。

うちの近くの森では、捨てられた犬が野犬になり、群れをなして、森の奥に住んでいて、人をみると集団で襲いかかってきます。

あるとき、息子と散歩をしていると、犬の鳴き声が聞こえます。身の危険を感じ、帰ろうとしたら、あっという間に、数頭が、近くまで寄ってきて、歯をみせて威嚇してきます。ようやく、走って逃げて難を逃れ、人のいる近くの道路にでることができました。野犬も自分の領地とそれ以外の領地を認識して、人がいることころまで追ってきません。

ところで、怖いのは、犬だけではありません。

家の近くに、もうひとつかなり大きな森林公園がありました。この森は、原生林で、木の背が高く、日光を遮るので低木もあまり生えない、静かで深い森林公園でした。ビツェフスキー国定公園といいます。

九〇年代だったと思いますが、この森で、連続殺人事件がおきました。この森林に散歩に来ていた人が、殺され、死体が木につり下げられたり、黒いリボンをかけ装飾されたり、死体の置く場所をチェスの配置のようにおいたりと、異常な事件でした。なんとその犠牲者は、若い女性から老人の男性といろんな人達で、六〇人以上もいたのです。

ついに、犯人が捕まりました。犯人はこの公園の近くに住む住民です。現場検証をおこなったところ、発見された遺体で、数人の遺体は、自分はやっていないといったそうです。検察官が、「うそをついているだろう。お前だろう！」と尋問したところ、

「自分は、殺人をプライドをもっておこなっている。」これらの死体は、「俺の殺人ではない」と答えたそうです。

このようなこともある中庭や森ですが、普段は、とても平和なコミュニティーの場所で、知り合いになったり、いろんな人とおしゃべりをする場所です。家族と離れ、しばし一服したり、隣近所の人と世間話をしたり、時には政治論争をしたりと、なくてはならない場所です。

スーパーマーケット

家の近くで、ソ連時代、食料品店にかわり、いろんな外国製の食料品を売っている西側タイプのスーパーマーケットがオープンしました。とてもきれいなスーパーで、私はすぐに買い物にいきました。近くをあるいていると、やせた四〇～五〇年代の男性が、「あそこのスーパーマーケットにいった？」と聞いてきます。

「はい、行きました」と答えると、

「どんな感じ？　いいもの売ってる？」と聞きます。

「うん。そうですね。いろんないい食料品を売ってますよ」といったところ、

「そっか―。いや、やっぱり俺は行かない。自分の精神衛生に悪いからね」と、にやっと笑います。

九〇年代ソ連邦が終わりをつげ、九〇年代の三大貧困層は、研究者や学者、お医者さんや看護婦さん、学校の先生だったのです。彼らは、ソ連時代には、中流階級で、しかもインテリ層でした。しかし、ソ連邦の

崩壊と共に、収入が極端に減り、生活に困窮しました。でも、インテリなので、モラルを顧みず、お金を儲けるためだけに、働くことはできなかったのです。

私が住んでいた場所は、科学アカデミーの官舎で、研究者や学者が多く、お金がなかったです。

Рынок〔Rynok〕

九〇年代は、社会主義から資本主義にかわり、社会が混乱しました。社会主義の時代は中流だった人達が、そうではなくなり、ビジネスも信用関係ではなくて、初期資本主義のような、取るか取られるかのようなスタイルです。

Рынок（屋外マーケット）が至る所にできました。販売が自由にでき、野菜やお肉などの食料品から日常品、衣服ヤミの商品もなんでも売っています。

あるとき、家に食べ物がないことに気づき、会社の運転手のイーゴリさんに、家の途中の Рынок で買い物をしたいから、「ちょっと止めて。すぐ帰ってくるから。」「何か起こったら、困るから、僕も一緒についていく」といいます。

「大丈夫だよ。私もう慣れているから」と言いましたが、彼はついてきます。

買い物が終わって、ふと地面をみると、なにか赤い物がみえます。だれかジュースでもこぼしたのかなと思っていると、人だかりが見えます。どうしたのかなと思ってみると、一四～一五才の男の子が血を流し倒れています。

周りにいる人達が、心配そうにみていますが、もうけいれんを起こし、死にそうな、かなり危ない状態です。

周りの人が「もう、だめだね」と言っています。

この男の子は、以前も見かけたことがありました。この Рынок で、こんな子供がビールを売っていたので、記憶に残っていました。周りをき

よろきょろ見て、赤い恥ずかしそうな顔をして、あまり慣れていず、明らかに新顔のようです。ビールを一〇本ぐらいかかえて売っていました。当時、Рынок はやくざが仕切っていました。販売している人は口銭をはらいますが、彼は口銭を払わず、ビールを売っていて、ついにみつかり殴られたのは明らかでした。

私は呆然として立ちすくんでいると、イーゴリさんが、「Акико сан, всё! Не надо больше смотреть. Давайте вернемся!」〔アキコサン、モウ沢山デス、コレ以上、見テハイケマセン、帰リマショウ〕と言います。

私は、車のなかで、我にもどれず「Почему?」〔ドウシテナノ?〕と思わず、口からでました。イーゴリさんは、悲しそうな顔をして、まっすぐ前を見、何も答えませんでした。

プーチン〔Путин〕

新しい時代のシンボルとして、登場したエリツィン。

彼の時代は、皆が新しい自由な世界、西側諸国のように生まれ変わるのだと希望に燃えていましたが、お金を奪い合うようなビジネスがはびこり、利益がたかいビジネスは「命がけ」のようになりました。

社会の秩序が乱れ、至る所で、賄賂や横領がはびこりました。

車を運転していると、金曜日は交通規則の取り締まりが厳しくなります。何故かというと、土日曜は休日なので、一般市民から罰金を徴収し、ポケットマネーにするのです。国家公務員の給与は安かったですが、どうせ賄賂を受け取るから、給与が安くても大丈夫と、おもうようになりました。警察官も、だんだんおかしくなり、もっと酷い警察官も出現しました。実はやくざを守って、その見返りの報酬を受け取っていたとか。

警察ばかりでは、ありません。

外国製品を通関する通関局、税務署の役人、市役所、公証人、裁判官などなど。すべてお金で解決できるような雰囲気になってきました。社会が乱れ、国が崩壊するのではないかという危機感があり、この気持ちがますます状況を悪化させたような気がします。

そして、極めつけがオリガルヒ〔Олигархи〕に代表されるような、政府の高官と協力し、国の資産や利権を取った人達でした。彼らは、短時間で、大金持ちになり、役所で定められたルールも例外的に免除され、何でもできるような特権をもっていました。

そんな時に現れたのが、プーチンです。

彼は、税制を改定し、いままで石油やガスなど国の資源を販売しても、国庫に納められる税金は、微々たる物でしたが、これをしっかりと税金を納めさせるようにしました。勿論、エリツィン時代に得た既得権者の反発も大きかったですが、彼らを排除しました。

また、ロシアに連邦管区制を導入し、代表者を住民の選挙で選ぶのではなく、中央政府からの任命制にするなど、国家機関の立て直しをおこなったのです。国家公務員の給与を保障し、警察が警察になり、通関や税務署も賄賂をとることが難しくなり、ようやく国の体制がもどったの

です。

私は、プーチンは世界の偉大なリーダーの一人であると思っています。

その理由は、全くの白とはいいませんが、少なくても国や国民の大多数の利益を第一に考えているからです。

あるプレスカンフェレンスで、フランス人記者が、「ロシアでは民主主義が守られていないが、貴方はどう考えられますか？」とプーチンに聞きました。

「それでは、聞きますが、フランスはＮＡＴＯに加盟していますね。もし万が一、ロシアとの関係が悪くなり、例えば、ＮＡＴＯがフランスにミサイルを配置し、そこから攻撃すると決定します。ロシアは、勿論その場所を攻撃します。そうすると、そこに住む住民達は大きな被害をうけることになるが、ＮＡＴＯが決定するときに、そこに住む住民の意見を聞くのですか？　貴方が言う民主主義とは、そういう民主主義のことですか？」と答えたのです。

ウクライナ侵攻が起こる前、安倍政権は、北方領土問題を解決するために、平和条約や経済協力など、いろいろな提案をおこない、両国の関係も今よりずっと良かったと思います。

あるロシア人の知人に「なんとか、問題が解決しないでしょうかね？」「日本とロシア、平和条約むすべないでしょうかね？」と聞きました。

彼が、「一番の問題なのは、日本は、自国の外交を決めることが出来るかどうか」ということだといいます。

彼は、すまなそうに、「自分達が思うに、日本は、自主的な外交を行なうことができない。今、ロシアとの協力を約束し、領土を返還しても、アメリカから軍事基地をつくれといわれると、つくるでしょう。」といいます。「そうすると、ロシアは、攻撃するよ。その攻撃は、北方領土というよりは、北海道とか本州とかのより主要な基地を爆撃する。北方領土とミサイル、どっちが日本にとって良いんだろう？」といいます。

奇しくも、彼が言ったことは、今回のウクライナ侵攻で、ＮＡＴＯに加盟していない日本がとった態度で、証明されたような気がします。